
ソロモンの鷹

水沢玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソロモンの鷹

【Nコード】

N6752B

【作者名】

水沢玲

【あらすじ】

昭和17年10月、空母「飛鷹」の若き海鷲、斉藤孝助二飛曹はガダルカナル島攻撃に参加した。そこで出会った者とは、「護国の鬼」とわかたける氏の小説「鋼鉄の猛禽」とのクロスオーバーです。

一章 ガダルカナル航空戦（前書き）

この作品は、護国の鬼の外伝であり、わかたける氏のサイト「もののふの島国」(<http://id6.fm-p.jp/146/19790616/>)に掲載された小説「鋼鉄の猛禽」とのクロスオーバーです。こちらもお読みいただくことをおすすめします。

一章 ガダルカナル航空戦

青い空、青い海。ところどころに千切れ雲が浮かんでいるほかは、ただ一色に染まった単調な風景が続いている。

その海と空の境目の一点が、わずかに隆起した。時間をおってその面積は広がり、さらに他の場所からも点々と、雨後の筍のように生えてくる。

「……見えた」

ソロモン群島、その中で最大の広さを誇るガダルカナル島。彼らの目的地である。

無敵とも思われた南雲機動部隊の四空母を撃沈し、意気上がるままに攻勢の端緒を捉えようとするアメリカ。ミッドウェー海域でまさかの大敗を喫し、一時の隆盛衰えたりとはいえ、今なお優勢を誇る日本海軍。両者は所をかえ、はるか南海、ソロモン諸島を舞台に衝突した。

数度にわたる海空戦は常に日本軍優勢に推移し、しかしながら米軍もまた善戦し、ガ島に建設されたヘンダーソン飛行場を堅守している。両軍とも兵站の伸びきったこの地で、容易に戦況は動かなかった。

昭和17年10月に入り、日本陸軍は膠着状態を打開するため、軍最強を称する仙台第二師団をガ島へ投入し、総攻撃を準備。海軍も海空の精鋭を総動員してこれを支援した。

当然ながら米軍の反撃も熾烈なものになると予想される。トラツク島に停泊していた南雲、近藤、角田らの各提督指揮下の艦隊はトラツク泊地を出撃し、厳重な警戒を施しつつ、一路南太平洋へと舳先を向けた。

戦雲は再びソロモンの空を覆い始めている。

10月15日、この日ガ島を空襲したのは、角田覚治少将率いる機動部隊に属する、空母隼鷹、飛鷹の二隻より発進した九七艦攻18、零戦18からなる攻撃隊である。

その中に飛鷹航空隊の若き若鷺、斉藤孝助二飛曹も、翼を並べていた。

二大洋に猛威を振るった機動部隊の尖兵。数こそ少ないが、彼らは間違いなく日本海軍、いや世界でも有数の精鋭である。その威容はかなうものなしと思わせるほどだが、だとしても米軍としてはただ爆撃を甘受するわけにはいかない。果たして、飛行場上空には15機ほどの迎撃機が待ち受けている。

その様子を遠くから望見し、いざ空戦かとはやる斉藤の前に一機の零戦が飛び出し、その鋭気をからかうように翼を振った。小隊長の白井中尉である。

『意気込むのは結構だが、暴れすぎておくれをとるなよ。そう毎度助けが来てくれるとは思うな』

にやにや笑う白井に斉藤は顔を赤らめ、恐縮したように肩をすくめてみせた。

最初の実戦で、真っ先に敵中に突入した斉藤はたちまちのうちに一機を屠り、初撃墜の名誉を得たが、それを実感する間もなく多数の敵に追われて必死に逃げ惑っていたのだ。

敵を振り切れず、今にも落とされそうだった斉藤を救ったのが他ならぬ白井だけに、斉藤としては彼に頭が上がらない。

そうこうしているうちに、彼我の距離は縮まっている。P-40

カーチス・ウォーホークの頭でつかちな機影がはつきりとうつり、パイロットの表情まで見えるほど近づいたとき、隊長の兼子少佐機の機首が赤くきらめいた。

たちまち南海の空が赤黒く染まる。双方の弾丸が交差し、2機のウォーホークと1機の零戦が爆発した。

時速800キロ以上の高速ですれ違った両軍。零戦はそのまま急旋回してカーチスの後ろを取ろうとする。対して、速度と重火力を誇るカーチスとしては、零戦の得意とする巴戦に巻き込まれては勝ち目はない。急降下して仕切りなおしを狙う。

両者の意図が激突し、激しい空戦が展開された。

後ろに食いつかれた零戦を振り切れず、放たれた20ミリをその身に受けて墜落するカーチス。

突如下方からカーチスの銃撃を受け、蜂の巣にされて空中分解する零戦。

苛烈な戦闘は、しかし意外に大規模なものとはならなかった。

全体の戦況は零戦に優勢であったが、彼らには最大の弱点がある。後方より飛行場へ迫っていく艦攻隊である。

米軍機が無力な艦攻へ攻撃をかけるそぶりを見れば、それが陽動だとしても零戦は艦攻をかばわなければならない。いくら熟練の勇者がそろっているとはいえ、日本軍としてはカーチスとの空戦に熱中してはいられないのだ。

それに、直衛隊の任務は、艦攻隊を護衛し爆撃を妨害させぬことにあるのだから、無理して敵機を撃墜する必要はない。艦攻に手を出さなければそれですむのだ。

だが、拮抗した戦局は、藁の一本で大きく傾くこともある。このとき女神が分銅を乗せたのは、米軍の背中だった。

『ちっ！ 増援か！』

白井の舌打ちが斉藤からも見えた。

いつのまにか、上空に新たな戦闘機が出現したのだ。巧妙に雲に隠れて接近したようだ。

歴戦の零戦搭乗員たちは色めきたちながらも、頭の中では冷静に分析を始めていた。

「あいつら、どこからやってきた？」

ガ島方面で唯一のヘンダーソン飛行場からは航空機が飛び立った様子はない。あらかじめ上空に待機していたのかもしれないが、彼らの挙動は待ち伏せ奇襲をかけるにしては少々不自然である。

距離が狭まり、輪郭がはっきりしていくにつれ、敵の機種が海軍向けに開発されたF4Uコルセアと判明したが、空母から発進したという可能性はあまりないだろう。敵機動部隊の出現に備えて厳重に展開された哨戒網に、敵空母は感知されていない。

ガダルカナル島の東南東800キロにあるエスピリット・サント島あたりから飛来し、たまたまこの空襲に遭遇したというのが妥当なところだろうか。

暫定的な結論が出たのはいいが、相変わらず状況はよろしくない。わずか6機のコルセアは、戦いたけなわの戦場に現れた新鋭として実力以上の存在感を放っている。

彼らがカーチスと呼応し、巧みな機動を見せれば、零戦隊は腹背からヒ首を突きたてられ、壊滅的な打撃を負いかねない。そして、護衛戦闘機が壊滅した攻撃機隊ほど悲惨な運命を義務付けられたものもないのだ。

大きく回り込もうとするコルセアの前に、白井中尉と3機の零戦が立ちはだかる。

すれ違いざまに白井機の放った20ミリ弾がコルセアの主翼を捉え、別の1機もエンジンから炎を噴きながら落ちていく。だが、その間に零戦も1機が主翼を大破させされ、持ち直す間もなく爆発し

た。

消耗戦に突入したか。歴戦の零戦乗り一人と敵機一機を交換では割に合わないのだが。

舌打ち交じりに斉藤が思ったそのとき、気まぐれな女神とやらは再び、今度は日本の側に重石を載せた。

コルセアの頭上から火線が降り注いだ。

突然の事態に啞然とする斉藤らの前で、2機のコルセアが煙を曳きながら密林へと吸い込まれていく。残った機の真横を、あまりに見慣れた影が急降下していった。

「零戦！？ どこから……」

あわてて周囲を走査した視線が、列島線の上空に無数の航空機を捉えた。

40機をこえる一式陸上攻撃機と、ほぼ同数の零戦。ラバウルから出撃したのであろう大編隊は、何人をも寄せ付けぬ威容を払いつつガ島へと向かいくる。

「ふう……助かったぜ」

思わず息をついた斉藤の前で、白井も冷や汗をぬぐっていた。歴戦の零戦乗りをしてその心胆を寒からしめるほど、戦況は米軍に傾いていたのだ。

新たな大軍を認めたカーチスとコルセアは動揺を見せ、致命的な隙をさらけ出した。

兼子少佐自ら先頭に立ち、銃弾を放ちながらの突撃に、彼らは脆くも壊乱した。零戦の火力に分断され、逃げ惑いながら散発的に反撃を加えるその横を九七艦攻がすり抜け、飛行場への爆撃針路に入る。

空戦の勝機は一瞬。それを掴めぬ者に女神は微笑まぬ。戦場を支

配する単純明快な原理を、斉藤は敗北と死の恐怖をもって実感した。ラバウル航空隊の来援があと数分遅れていれば、そうでなくとも彼らが我々の戦場を発見せず、援護の零戦を先行させることがなければ、今頃斉藤は密林の栄養になっていたかもしれない。

あらためて心を引き締める、その心理的余裕ができたのも、大勢があらかた決したためである。米軍戦闘機の大半は周囲から駆逐され、視界の中を飛んでいるのは零戦と九七艦攻ばかり。そのうち、斉藤機とすれ違った零戦は、天秤をひっくり返したラバウルの戦闘機だった。

わずか一瞬だったが、斉藤の驚異的な動体視力は相手の搭乗員をしつかり捉えていた。おそらく同じ年頃の精悍な顔立ちで、鷹のような鋭い眼が強烈な印象を与えた。

姿を覆い隠すほど激しく撃ち上げてくる高射砲にもまれながら、艦攻隊は合計108発の60キロ爆弾を投下した。

鳴動する大地は、3千メートル上空にいる斉藤にまでその振動を伝え、戦闘の終了を象徴した。

二章 飛鷹、遭難

15日の空襲により、角田部隊は零戦3、艦攻1機を失ったが、攻撃は成功裡に終了した。戦闘機12機を撃破、地上で2機を破壊し、滑走路や各種施設にかなりの被害を与えた。

幸先いい出足に、角田部隊は沸いた。陸軍の第三次総攻撃を22日に控え、敵航空戦力を削ぐことは至上命題である。ラバウル航空隊の奮戦もあり、ガ島の米軍部隊はかなり損害を受けていることは確かである。

この戦果に満足した角田少将は一度矛を納め、空襲を避けて北上した。

隼鷹、飛鷹の搭乗員には、南雲機動部隊の生き残りも多数含まれており、角田自身も空母龍驤と竣工したばかりの隼鷹を率いてMI作戦の支作戦に参加している。ミッドウェー海戦の記憶も生々しい彼らにとって、陸上基地と敵空母部隊を同時に相手取ることだけは避けたいところだった。

いよいよ総攻撃である。艦隊への給油を終え再び南下、ガ島に接近する角田部隊の鼻先に水をさされたのは、20日に入ってからだった。

「攻撃延期？」

突然入った艦内放送に、待機室にたむろしていた搭乗員たちは耳を疑った。それはお茶を片手に仲間の囲碁を観戦していた斉藤も同じだった。

総攻撃を1日延期するというのはのである。

「なんだってまた……」

困惑げな表情を浮かべつぶやく斉藤に対し、隣の白井が無然とした顔を向けた。

「部隊の展開が遅れてるんだろ？ なにせジャングルの中だからな、敵さんの妨害もあるだろうし、1日ぐらいはしょうがねえだろうよ」

「でも、そこら辺も考えて作戦つてやつは立案してるんでしょ？ こつちだつてそのつもりで動いてるんだし、簡単に遅らせてもらっちゃ困りますよ」

実年齢より2歳は幼く見える顔に憤懣の表情を見せる斉藤。それを制するように、白井は腕を組んで虚空をにらんだ。

「俺たちのやることは変わらん。命令があれば飛ぶ、それだけだ」
自分自身を納得させるような語調だった。

その語尾に鈍い衝撃音が重なり、艦のローリングとは別の揺れが加わった。

それが収まると、静かになった。完全に。そう、母艦乗りが慣れ親しんでいる機関の駆動音、振動さえなくなったのだ。

「どうした！」

「なにがあつた！」

飛び交う喧騒の中に「機関故障」の単語が混じり、その声が大きくなるまでさほどの時間は要さなかった。

「おいおい、本当に大丈夫かよ……」

泣きつ面に蜂と言おうか。度重なる事態に、今度こそ白井も困惑の感情を隠せなかった。

飛鷹は、貨客船「出雲丸」を建造途中で改装した改造空母である。排水量は2万5千トンと主力空母の翔鶴級に匹敵し、搭載機数48

機も正規空母と比べてなんら遜色ない。

この巨体を支える推進力は実に5万6千馬力を誇り、莫大なエネルギーは2基のディーゼル機関から生み出されるが、この機関がくせものだった。

ディーゼル機関は、巡航速度の航行での燃費効率はすばらしく高い。まさに商船に向けたエンジンである。

しかし、絶えず速力の変更を強要される軍艦の機関としてはタービン機関にその適性を一步譲る。特に、航空機を運用するたびに最高速を出さねばならない空母にとっては少々扱いづらい機関である。

「糧原丸」を改造した姉妹艦の隼鷹は、6月のアリューシャン作戦で機関が故障し、途中で帰投を余儀なくされた。そのときの悪夢が赤道の南で、今度は妹に襲い掛かったのである。

機関科員の奮闘もかなわず、ついに飛鷹の機関は回復しなかった。かろうじて自力での航行は可能となったが、低速での作戦行動など不可能だ。角田少将は一度戦域を離脱し、部隊を再編するよう命じた。

22日、再度連合艦隊司令部より入電。陸軍部隊の総攻撃はさらに一日延期となった。

飛鷹の搭乗員待機所は再び沸騰した。

「なにやってやがるんだ、やつらは！」

「やっぱり陸式なんかあてにできねえ！ 大口叩くくせに、自分たちの仕事も出来ねえのかよ」

大国において陸海軍が仲よくやっているという例はほとんどない。こと日本軍においてはそれがひどかった。

特に、太平洋戦線では海軍が主役と言う意識がある。実際、ソモン方面に陸軍機はほとんど配属されていない。海上での航法を習っていない陸軍パイロットは、はるかラバウルまで独力で飛んでこ

れないのだ。

もちろん、これは海軍航空隊より陸軍のそれが劣っていることを証明しない。後に、海軍部隊の指揮下に入り各種の訓練を受けた「飛龍」重爆隊は、本家の陸攻隊をして瞠目せしめるほどの精鋭雷撃隊へと変貌するが、これはまだ2年以上先の話である。

戦闘機隊長の兼子少佐は、艦橋に詰めっぱなしで待機所に戻らない。自然、暴虐極まりない言葉を吐き続ける搭乗員たちを抑えるのは、白井ら古参の連中となる。

「いい加減にせんか！ 友軍同士、^{おとし}貶めあつたところでどうにもならんだろつが！」

彼らに一喝され、罵詈雑言の嵐は収まったが、心中のわだかまりまで消え去ったわけではない。なにより叱るほうも苦々しい感情を抱えているのだから、憤懣が解消されるわけがなかった。

白けた沈黙の中、斉藤がぼつりとつぶやいた。

「俺たち、どうなるんでしょうかね」

飛鷹はもはや戦力外であるが、搭載機まで使えないわけではない。決戦近しとなれば、たとえ一機の零戦たりとも無駄には出来ないはずである。

「そうだな。格納庫に入る限りは隼鷹に乗つけて、残りは……」

そこで白井は口元をゆがめ、にやりと笑って見せた。

「ま、うちの司令は『あの』角田覚治だ。悪いようにはせんだろ」

翌日、「あの」角田少将は、隼鷹に移しきれなかった航空機に、陸上基地へ進出するよう命じた。

貴重な戦力を飛鷹の格納庫で腐らせるほどなら、陸上によりガ島攻撃に協力させるべし。猛将・角田覚治の面目躍如たる判断だ。

悄然と静まり返っていた飛鷹の飛行甲板は、久方ぶりに活性化した。

飛鷹飛行長の三重野少佐が指揮し、兼子少佐、白井中尉ら零戦16、九九艦爆17機がラバウルへ飛び立つ。当然、白井小隊に所属する斉藤もともにラバウルへ向かうこととなった。

狭い空母の発艦作業は、迅速さが命だ。エレベーターによって上げられた航空機が、目にも見えぬ速さで次々と飛行甲板を蹴って飛び出していく。

まず艦爆がラバウルへの旅程へと就き、それを追って零戦が飛び上がる。兼子少佐、白井中尉と続き、いよいよ斉藤の出番となった。

「回せー！」

怒号とともに若い整備員がプロペラを思い切りまわす。零戦の軽快なエンジン音が、飛行甲板を支配した。

甲板の上を流れる風は、しかし静かだった。普段は25ノットの全速で突っ走っている空母は、今日はその半分ほどの速度である。

飛鷹が自力で出せるのは8ノット足らず。これでは到底艦載機の発艦はできないので、駆逐艦に曳航させ、それに海上を吹き渡る風を併せてようやく発艦可能な合成風力に達したのである。

とはいえ。

「本当に大丈夫なのかよ……」

低速小型の瑞鳳すいほうや大鷹たいように乗った経験があるものなら別段恐怖は感じないだろうが、斉藤は飛鷹が初めての母艦乗り組みである。全速でひた走る飛鷹しか知らない斉藤が、彼女の見せる全く別の顔に戸惑うのも無理はない。

斉藤の心配をよそに、零戦は飛行甲板をすべる。

甲板の切れ目で一瞬沈み込むが、慌てて操縦桿を引く愚は犯さない。失速して墜落しないようにゆっくりと機首を上げると、機銃や照準機をはずした身軽な機体は案外簡単に高度を上げた。

飛鷹を曳航する駆逐艦「江風」^{かわかぜ}のマストを飛び越え、とりあえず
ほっとした斉藤は、白井機を追いかけて高空へ舞い上がった。

三章 ラバウルの鷹

青空の下に大きな立て幕、フラダンスで迎える可愛い踊り子。そして、花輪とともに投げかけられる黄色い声。

「ようこそ、ラバウルへ！」

もちろん、ここはまごうことなき最前線の基地。そんなものが待っているわけではないが、平時ならばそれぐらいはやりかねないだろう、と思わせるほどの熱烈歓迎振りだった。

飛鷹航空隊の到着には、六空の森田司令らがわざわざ飛行場へ出迎え、着任報告に上がった十一航艦司令部では草鹿長官自ら指揮所の前で炎天下に彼らを待っていた。

しかもなんと陸軍第八軍司令官の今村均大將が大勢の幕僚を連れて訪問、隊員全員に慰撫の言葉をかけるなど、予想もしなかった厚遇を受けたのである。

「いやあ、俺たちも出世しましたねえ」

夜には歓迎会と称した宴会が催されるという。なんともはや、としかいいようがない。

すっかり気分が高揚した斉藤の横で、白井も苦笑いである。

「ま、角田の親父の判断は間違ってたということだ。これだけ歓迎されておいて、相応の働きをしなかったあかつきには袋叩きにされかねんぞ」

当然、これだけの待遇には理由がある。それも散文的な。

着任より半日、飛鷹の艦上で聞いていた「ラバウル空の可動機30機内外」という情報が間違っていないことを、白井らはその目で確かめた。

連日の激戦は、零戦や陸攻の損傷を激増させている。被撃墜機が多くないだけましではあるが、整備員の昼夜兼行の修理も全く追いついていない。

それに加えて、歴戦に疲れた搭乗員をマリアアやデング熱が襲う。米軍と熱帯風土病との闘いに忙殺される彼らの元へ、突然届いた3機の航空機と新鮮な搭乗員。狂喜乱舞するのわからないではない。

本来なら飛鷹の格納庫でただ飯食らいとなっていた斉藤らを、ラバウルの「救世主」として派遣した角田少将の戦略眼は正しく報われたと言えるだろう。

ようやく煩雑な手続きを終え、暇をもらった搭乗員たちは三々五々散っていった。斉藤も、白井のお供をしてラバウル市街の散歩としゃれ込んだ。

体格雄偉な白井に、小柄で少年の色濃い顔立ちの斉藤が並んで歩くと、歳の離れた中のよい兄弟のようだ。

先ほど、それを見た兼子少佐が斉藤を「飼い主の周りを飛び回る仔犬だな」と評し、たちまち猛抗議を受けて市街向けのトラックを一本逃がしてしまったというおまけがついた。

白井とともに現地人の店をひやかしつつ、椰子の実のジュースを買い込んだ斉藤は、目の前を横切った海軍の下士官に妙な既視感を感じた。

飛行服に身を包んだしなやかな肢体、小さく整った輪郭には全く見覚えがない。だが、彼が身に纏う雰囲気……獲物を見据えた鷹のような、鋭い視線は、斉藤の体が覚えていた。

そう、それもいい最近に……

「……あ！」

思わず声を上げ、その男を呼び止めるべく駆け出した斉藤を見て、やれやれと言わんばかりに頭をふった白井はゆっくりと後を追った。

「やっぱりそうだったのかあ！」

ところ変わって兵舎前の宴会場。

斉藤は湯のみを抱え、先ほど見つけた男の前に座り込んでいた。彼の名は滝克俊。階級は二飛曹、内地より配属されたばかりの、六空の零戦搭乗員である。

15日のガ島空襲で、本隊より先行して飛鷹戦闘機隊の窮地を救った、あのパイロットだったのだ。

「君たちがいなければ、我々はラバウルの地を踏むことが出来なかったかもしれない。飛鷹航空隊を代表して、礼を言わせてもらおう」いささか堅い謝辞を残して、白井は他の喧騒へ去っていった。士官がいては若い彼らが騒げぬと、白井なりの配慮だったのかもしれない。

滝は今年で17歳。斉藤も同年であり、まして零戦乗り同士、一脈通じるものがある。

話は弾み、遠征軍につきものの故郷の話となった。

「そうか、瀬戸内海は氣候が穏やかだよな」

「まあな。冬もそれほど寒くはならないし、すごしやすいほうかもしれないな」

「いいなあ……」

斉藤はうらやましそうに相好を崩した。

「千葉は夏は暑いし冬は寒いし、俺みたいなのにはいづらいんだよな」

寒がりで暑がりの斉藤は軽く肩をすくめて見せた。

もつとも、4千メートルの上空に上がれば零下の極寒に襲われる零戦に乗っている斉藤である。いまさら地上の寒さに不平をもらす必要はないようにも思われるのだが。

「だが、故郷はなかなか離れられまい。これもいることだしな」
「は？」

小指を立てた滝の意図がつかめず、首を傾げた斉藤は、数瞬の間をおいて顔を真つ赤に染めた。

「な！　ば、ばか言え！　そ、そんなやついねえよ！」

「ほう？　では、『まだ』ということか？」

空中での数十分の一も器用さを発揮できない斉藤を見て、滝はいたずらっぽく目を細めた。その顔から猛禽類の鋭利さは消え、残ったのは17歳の少年に相応の笑顔だった。

「お、お前はどうなんだよ！」

「いるよ」

あつさりと返され、言葉に詰まる斉藤の前に、一葉の写真が差し出された。

そこには15、6歳の少女が写っていた。ややふつくらした顔つきは生氣にあふれ、いかにも元気そうだ。

防空訓練の際に撮ったようで、モンペに防災頭巾という味気ない服装でありながら、その写真からは花のような可憐さがにじみ出ている。

「吉岡雪子と言った。家が隣同士でな」

「ふうん、かわいいな」

「そうか？」

そつけない答えを返しながらも、滝の表情はどことなく誇らしげだった。

「で、斉藤、お前はどんなんだ？」

不器用ながらも必死にごまかしていた斉藤だったが、滝の執拗なまでの追及に、ついに洗いざらい白状してしまった。

「……名前は里見真紀で、小学校で同級生だったんだ。家も同じ町内で」

「ふむふむ、それで？」

「いや、それでもなにも……うん、係とかよく一緒になって、それでよく話すようになって……なんか、いつの間にか……そんな、ことに……」

哀れ斉藤、頭の先まで真っ赤にして沈黙してしまった。もつとも、それは気恥ずかしさだけではなさそうだ。

しどろもどろになるたびに湯呑みをあおり、中身を入れ替えること3度。どちらかと言えば酒に強いとはいえまだ未成年の斉藤の体からは、酒精がぶんぶんと漂っている。

「……で？　なぜ告白しなかったんだ？」

さすがに懲りたか、椰子ジュースを湯呑みに注ぎ、口に含んだ斉藤は、滝の発言にたちまち噴き出してしまった。

「な、なぜって……」

椰子ジュースで咳を呑み込み、呼吸を整えてから、斉藤は聞き返した。

「真紀さんがどう思っているにせよ、お前は好きなのだろう？　出征のときなら充分可能だったろう。なぜしなかったんだ？」
好奇というより、滝は純粹に尋いてきた。

斉藤は考え込んでしまった。そう言われると、自分でもわからない。

別に理由などない、というのが本当のところだ。機会さえあればしていたかもしれない。実際、予科練を卒業し帰郷した際に、斉藤は彼女を呼び出し、言うつもりだったのだ。

それをなぜ躊躇しまったのか。

「……これから戦場に出るんだぜ？　いつ死ぬかわからないやつから『好きだ』なんて言われたって、迷惑なだけだと思わないか？　下手なしこりが残るくらいなら……」

「……なるほど、そういう考え方もあるか」

とりあえず自分の理論を整合させると、斉藤は空になった湯呑みを放り出し、草むらに寝転がった。意識が薄くなり、自慢の平衡感覚がおぼつかなくなっていた。

「それにしても、どうせなら写真くらいもらってくればいいものを」

という声に答えようとしたが、舌がうまく回らない。瞳に写った南海の星たちがぼやけ、暗闇に溶け込み、やがて暗闇すら感じられなくなった。

もし相思相愛であつたとしたら、何も言わないまま戦死でもすれば余計に負担をかけるのではないか。

だが、斉藤も淹もまだ１７歳の少年である。彼らの卓越した視力をもってしても未来はいまだ遠く、現在を見るのが精一杯だった。

今、言えるのはこれだけである。

「死ぬわけにはいかないな」

ラバウルの星空に包まれながら、いつしか2人の若鷺は眠りについていた。

四章 刀島強襲

翌日、飛鷹航空隊はさつそくラバウルの地を飛び立った。

エンジン故障の艦爆1機を除く零戦16、九九艦爆16に加え、ラバウル航空隊からも零戦20、一式陸攻18を動員し、持てる全ての力を持って米軍航空戦力を叩こうというのだ。

遅れに遅れた仙台第二師団の総攻撃も、ようやく今夜半行われる見込みがついた。そうとなれば、海軍も座視しているわけにはいかない。

地上部隊にとって空からの支援の存在がどれほどの脅威となるか、海軍の兵卒といえど熟知している。酒精の力を借りた搭乗員たちは次々と愛機に飛び乗り、日の出すら待たず薄暗い大空へと舞い上がっていった。

ところで、昨晚大量の酒を飲み干した斉藤であるが、彼が頭痛にさいなまれつつ兵舎を出てくると予想した滝は、本人の姿を見てあいた口をふさぐことができなかった。

斗酒なお辞さずの酒豪ぞろいの先輩たちに揉まれたためか、それとも2代にわたって海軍士官を輩出した血統のなせるわざか。いずれにせよ、ベッドから出てきた斉藤は滝などよりよほど顔色がよかったのだ。

いろいろと聞き出そうとした滝の思惑もあり、斉藤の酒量は滝のそれをはるかに上回る。にもかかわらず、何事もなかったかのようには整備員と挨拶を交わす斉藤の姿に、滝のみならず白井も言葉を失ったものである。

それはさておき。

ラバウルからガ島までの距離は約1千キロ。零戦の戦闘可能半径のほぼ限界点であり、飛行に要する時間は実に3時間におよぶ。卓抜した技能と体力を持つパイロットといえど、片手間に行って帰ってこれる距離ではない。

あわせて、今日の空は少々機嫌が悪いらしく、たびたび編隊の行く手を積雲が妨害する。彼らはそのたびに針路を変えることを強いられ、燃料と気力をそがれていく。

詳細に叙述すればそれだけで一章を割けるほどの苦労を排し、ようやくアウステン山の輪郭を雲の合間に捉えた斉藤らを歓迎したのは、花束や美女の類では当然ない。

ウンカのごとき戦闘機の大群を視界に捉えた兼子少佐以下は俄然緊張した。

数は優に50機を超える。陸軍のP-38ライトニング、P-40ウオーホーク、P-39エアラコブラ、海兵隊のF4Uコルセアに海軍のF4Fワイルドキャットまで、米軍の第一線戦闘機が勢揃いである。

「ずいぶんと手厚い歓迎じゃないか。返礼は相応にしなけりや失礼つてもんだよな」

一人コクピットの中で豪語した斉藤の声は、わずかに興奮の熱を帯びていた。

寄せ集めとはいえ、連日の激戦による損耗を感じさせない米軍の補給力に、斉藤は驚かざるをえない。

一通り驚嘆の念を味わうと、斉藤は小さな違和感を覚えた。普通なら見逃すような、せいぜい蚊に刺された程度の小さな感触だが、鋭敏になっている斉藤の感覚はそれを見逃さず、執拗に追いかけて、ついに答えを叩き出した。

敵の強烈な戦意が、こちらに向いていないのだ。

「中尉、これって……」

確認するように問いかけられた白井は、平然と頷いた。

『どうやら先客が来ていたようだ。おおかた、角田の親父だろ
う』

そういつて北方を指し示す。通常より多い雲のためいささか見にくいだが、一路敵編隊へ接近する、零戦と九七艦攻の見慣れた機影は見間違うはしかなかった。

飛鷹の戦線離脱により、角田機動部隊の空母は隼鷹の一隻のみとなった。当然、基地からの空襲に対する防御力は半減している。それにもかかわらず果敢に接近し攻撃隊を飛ばす、その胆力は常人のものではなかった。

かつて空母「龍驤」^{リウセイ}の艦砲で輸送船を撃沈した経験すら持つ角田少将であり、のちには航続距離外から出撃する攻撃隊に向かって「間合いはまだ遠いが、本艦は全速力で諸君を迎えに行く」と言わしめるほどの闘将である。

そんな提督が、この時期に及んで攻撃をためらう要素はどこにもないかもしれない。

目の前の敵に気をとられ、奴らはまだ我々に気づいていない。この好機を逃すべからず。

戦後に法学博士となる人物を兄に持つ兼子少佐の明晰な頭脳は、短時間で緻密かつ明快な作戦を立てた。

まず、飛鷹空の零戦のうち8機を割いて少佐自ら統率し、艦爆と陸攻を引き連れ敵編隊へ直進する。

当然敵はこれに気づく。いや、こちらからすれば軍艦マーチ付きで堂々行進してきたようなものだから、見逃されてはたまらない。

しかも、隼鷹空とともに敵を挟撃する体勢をとってはいるが、敵は我々両隊を併せた数よりはるかに優れる。そして、少数の護衛機の後ろには、「早く食ってくれ」と言わんばかりに無力な爆撃機が控えているのだ。

案の定、敵は自軍を二手に分け、威圧感を辺りに撒き散らしつつ突進してくる。隼鷹航空隊と合同する前に、数で押して脆弱な爆撃機ごとひねり潰してしまおう、という魂胆が見え見えだ。露骨ではあるが正統な戦法である。

屈指の精鋭とはいえ、数倍の敵に囲まれては苦戦は必至だ。それを承知で、少佐はみずから囀の役となったのである。

『来るぞ！ 気をつける！』

白井が警告を放った直後、彼我の間の空間を銃弾が貫いた。

敵の機数は約3倍、銃弾の数差はさらに上に行く。

威力の高い20ミリ機関砲を備える零戦に対し、発射速度と安定性に優れる12.7ミリ機銃を中心に装備しているのが米軍機の特徴だ。

一撃必殺の日本、数で圧倒するアメリカ。そう言いかえてもいい。

つまり、必要量をそろえた時の米軍は手がつけられないほど強い。統制が取れている限りは。

「あー、ちくしょう！ 下手な鉄砲をバカス力撃ちやがって！」
尽きることのない敵弾をひらひらとかわしながら、斉藤は悪態をつく。つまり、悪態をつけるほどには余裕があった。

やはり、機種が不ぞろいなためか敵の足並みはかなりずれている。艦載機のワイルドキャットから双発・双胴のライトニングまで多士済々なのだから、歩調をあわせるのは確かに難しいだろう。

火力の過密を冷静に見極め、適度に敵を攪乱すれば落とされることはない。9機の零戦パイロットはそう見切った。

もちろん見切ただけでは意味がない。すでに2機が猛砲撃を避けることに失敗し、爆発四散している。斉藤自身もその身に銃弾を受け、墜落には至らないまでもその心胆を寒からしめたのは一度ではない。

『えい、面倒だ。 斉藤！ やるぞ。 ついてこい！』
「了解！」

無言の交信を終えると、白井機が激発同様に動き出した。

まず、敵を誘い込むように大きく左旋回をうつ。つられて機首をめぐらしたウォーホークの腹部に、斉藤機の放った20ミリ弾が炸裂した。

その後ろに、今度はワイルドキャットが迫っている。敵の一連射をかわすと、斉藤は閉口したように右へ逃げてみせる。予想通り追ってきた敵機の後ろで、今度は真後ろについた白井機の機銃が唸りを上げ、右主翼を撃砕した。

だが、その後ろからはさらに3機のライトニングが。きりがなし。斉藤も減らず口を叩く余裕を失っていた。

「早く来いよ！ こつちが全滅したら意味ねえだろうが！」
その語尾に新たな銃撃音が重なり、1機のライトニングが火を吹いた。

「ようし、いいぞ！」

斉藤が思わず歓声をあげ、白井はバンクをふって安堵と喜びの感情を伝えた。

兼子少佐の作戦は、兼子隊8機が必死に敵の攻勢を支えている間に、残りの28機が鷲淵少尉の先導で高度を取りながら巧妙に雲に隠れつつ米軍の後背に接近し、逆落としに突撃するというものだった。

多少時間はかかったものの、敵に感づかれることなく戦闘空域に到着した主力部隊の鋭鋒は、隼鷹空と兼子隊とに分散していた米軍戦闘機隊の背中を貫き、見事死命を制したのだ。

斉藤の後ろに張り付いていたライトニングを撃破したのは、やはりというか、滝の操る零戦だった。

左手を上げて感謝の意を示した斉藤に、滝はそっけなくうなずくと操縦桿を引き、機体を左上に向けた。

滝の後ろには先ほど逃げ散ったと思っていた2機のライトニング。彼らはどうやら不屈の精神の持ち主らしく、あるいは状況がわかっていないのか、離脱したふりをして執拗に追っていたのだ。

「なるほど」

滝の意図を察した斉藤は、左旋回でライトニングの横っ腹に回り

込む。彼らのうち1機は、窮地に陥ったことに気づき急降下で逃げようとする。

斉藤は機体を降下させつつ持てる全ての火力を放つ。急降下した機は斉藤の張った弾幕に自ら飛び込む形となり、双胴の胴体を蜂の巣にされてそのまま墜落していく。

この時点で、逃げ遅れたもう1機の命運は決していた。

宙返りの頂点で、滝は思い切りフットバーを踏み込んだ。失速したように高度を落とした零戦の機体はライトニングの後ろで水平に戻り、20ミリを吐き出した。

敵は回避運動をとる暇さえ与えられず、翼を引きちぎられて爆発する。

「おお、すげえ！」

空中で機体を横滑りさせ、わざと失速させて通常よりはるかに小さい半径で宙返りさせる。零戦ならではの機動性と機体の軽さを最大限に活かした、「捻り込み」と呼ばれる最高級の荒業であった。

当然、非常な技量が必要とする技だが、滝はそれをあつさりこなしてみせたのである。

機首を引き上げ、高度を戻した斉藤の後ろから、新たに撃墜スコアを追加した白井が戻ってくる。そのさらに後方で、攻撃隊がエンジン音を吹かし、飛行場へと突撃していった。

まったく鮮やかな作戦だった。つい数分前まで日本軍の2個部隊を各個撃破しようとしていた米軍迎撃部隊は、今や逆に三方から包囲され、撃滅されようとしているのだ。

一瞬にして逆転を喫した米軍パイロットは、しかしその事実に気づいていないかもしれない。なまじ数が多いために命令や戦況の周

知が徹底できないのだ。何が起こっているのかわからないまま数機の零戦に追い回され、奮戦空しく撃墜されるパイロットも多かった。もつとも、戦果は意外に少ないかもしれない。米軍機の中には急降下で逃れ、命拾いをしたものがいたためだ。

機体構造が弱いために速度制限のある零戦は、それを追うことはできない。みすみす長蛇を逸する形になったが、いずれにせよ、基地爆撃の目的は達成できそうだった。

『おう斉藤！ 2機やったぞ』

指二本を立てて振る白井に、斉藤は笑いながら三本の指を示した。

『ちえ、貴様に負けたか。俺も落ちたもんだ』

そういつて大笑する白井に大仰に肩をすくめて見せたとき、腹に響くような轟音とともに、飛行場に盛大な土煙と火炎が、攻撃成功を示す花火のように高々と上がった。

『よし、終わったか。そろそろ帰るぞ』

『はっ！』

ゆっくりと機首をめぐらし、集合地点へ向かおうとした、そのとき。

気づいたときは、すでに遅かった。

「中尉！ 上……！」

業火の矢が降り注いだ。

五章 恩讐の果てに

斉藤の絶叫が空しく風防内に響いた。

悪魔のような正確さで白井機を捉えた無数の12.7ミリ弾は、白井の懸命な回避運動をあざ笑うかのように零戦のエンジンを貫き、風防を砕き、翼を打ち砕いた。吹き上がる炎と舞い散るジュラルミンが、斉藤の目に鮮明に映った。

「中尉……！」

力なく急降下する白井機を追おうと慌てて機首を翻した斉藤は、その上を飛ぶ航空機に目を奪われた。青く塗られた長い胴体、途中で折れたような逆ガルの主翼。勝ち誇ったように目の前を旋回している。

「あの野郎！」

仇を見つけた斉藤の瞳が灼熱した。

斉藤と白井が初めて出会ったのは、実はほんの5ヶ月前、昭和17年6月のことだ。当時、中国の漢口基地に進出していた白井小隊の三番機として新たに配属されたのが最初である。

予科練を出たての斉藤は、やる気と根性だけは人一倍あっても技術と経験は全くなかった。彼に潜在する素質を白井は認めたが、それだけでは激しい空戦を生き残れないことを、歴戦の彼は熟知していた。

白井の訓練は苛烈を極め、斉藤はそれに応えてみせた。白井の技術を貪欲に吸収し、彼のもとで経験を積み、いまだ不十分ながらも

立派な若鷲として成長した。

斉藤にとつて白井は敬愛すべき上官であり、尊敬すべき撃墜王^{エース}であり、兄のように慕うべき存在だった。

その白井を一瞬にして奪い去ったコルセア。たとえ中尉が赦そうとも俺は赦さない。何を犠牲にしようとも。斉藤は復仇の念にとらわれ、心を奪われた。

熾烈な戦闘が始まった。

急旋回、急上昇、急降下の繰り返し。斉藤の派手な操縦に、零戦の華奢な機体がときおり悲鳴をあげる。

空中分解の危険を考えない無謀なほど大胆な操縦は今に始まったことではないが、今の彼の技術は常を超えていた。

ボルトが弾け飛ぶ直前までエンジンを吹かし、フレームが歪む限界まで機体を振り回す。帰還すら半ば思考から追い出し、怒濤のような斉藤の攻撃は明らかに常を超えていた。

それを見事に受け止めたコルセアのパイロットも、卓越した技量の持ち主と言わざるをえないだろう。零戦に分のある水平格闘戦、しかも荒つぽさが残るとはいえ鷹のような剽悍さをもって縦横に飛び回る斉藤を相手に一発も被弾することなく立ち回っているのだ。

だが。

「これで、終わりだ！」

童顔に似合わぬ血走った眼でコルセアの姿を捉えながら、斉藤は聞かれるはずのない怒号を放った。

さすがに「ゼロ・ファイター」の名は伊達ではない。ボルト一本

まで神経を尖らせ、数グラム単位で徹底的な軽量化を施した零戦の旋回能力は、どれほどの名パイロットであろうと米機に追従を許すものではない。

そして、その零戦の能力を最大限に活かし、退路を絶ちながら敵機を確実に不利な体勢へと追い込み、万全の機会を作り上げる。堅実さを好む白井直伝の戦法である。

斉藤は、この悠長な戦術に必ずしも納得してはいない。展開の速い空戦の中でみすみす敵を見逃し、性急な斉藤に歯噛みさせたことも一度ならずある。だが、白井の護衛する爆撃機が落とされることはほとんどなく、飛鷹の防空戦闘で敵に母艦への攻撃を成功させたことは皆無だ。

逃げる機会を与えない斉藤に焦れたか、敵パイロットは一気に勝負に出た。真正面に向き合つと、6門の12.7ミリ機銃を乱射しながら突撃してきたのだ。

これこそ斉藤の思う壺だ。彼は思わずにやりと笑った。

真正面から衝突せんばかりの距離で交差した次の瞬間、両機は操縦桿を倒した。零戦は右に、コルセアは左に。

同方向に舵を切り、切ったのはほぼ同時。そして、旋回半径は零戦がはるかに小さい。半分も回っていないコルセアの背中に張り付くのは容易だった。

照準器からはみ出すほど広がったコルセアの尻に、斉藤は震える指をおさえつけながら発射釦を引いた。

「もらった！」

放たれた一撃は、斉藤の予測通りの軌跡を描いて敵機に殺到し、コルセアの胴体を微塵に砕くはずだった。だが。

「消……えた!？」

50メートル先にいたはずのコルセアは一瞬のうちに斉藤の視界

から飛び去っていた。

急降下で逃れたか、宙返りをうったか。機体を捻って下を走査するが、視界に入るのは不幸な被撃墜者を呑み込もうと貪欲な口を開けている密林ばかり。上はあくなく広がる虚空と点在する白雲。そのどちらでもない、とすれば。

「後ろか！」

ほとんど本能的に操縦桿を倒し、フットバーを踏み込む。急激に回転する視界の右端を、獲物を捕らえそこねた猛禽の牙が赤い光を撒き散らしながら飛び去っていく。

「くそ、そういうことか！」

しかけはそれほど大したものではない。急激な水平旋回にフラップ操作や横滑り運動を組み合わせて一気に速度を低下させ、失速寸前の状態に持ち込むだけ。

この傍目には速度を浪費するだけにしか見えない機動が、真後ろについた敵には瞬間移動の魔法と化す。ほぼ同速度で同航していると信じているのが、その実200キロ近い速度で接近しているのだ。いかに驚異的な動体視力を持つ斉藤といえど、これを追いきれるはずがない。そして敵を見失い、狼狽するパイロットの真後ろから悠悠と奇襲をかけられる。そういうことだ。

もちろん、この技術には欠点も多い。空戦にとって命ともいえる速度をわざと失うのだから、直後は攻撃に対して無防備な状態をさらすことになる。敵が察して逃げを打ってもそれまで。さらに、経験を積んだパイロットなら、この派手な機動を注視していれば策に気づくことができるはずだ。

それを斉藤に気づかせなかったコルセアのパイロットが優れてい

たとも言え、同時に目の前の敵に躍起になって気づかなかった斉藤が「まだ若い」ともいえるだろう。

これ以上時間はかけられない。戦闘前に増槽を投下している零戦の燃料はとうにラバウルまでの分を割り、このままではブインの緊急用飛行場にたどりつけるかすら危うい。

斉藤は勝負に出た。機首を軽く下げて速度を稼ぐと、一気に操縦桿を引き宙返りの体勢に入る。零戦の必殺技、捻り込みだ。

コルセアは動かなかった。動かないことで勝利を得ようとした。応援に駆けつけた友軍のライトニングが時期の後ろにつき、援護する旨を無線で伝えてきたのだ。

あの猪野郎がライトニングの存在に気づかず捻り込みを完成させてくれれば、ジーク（零戦）の強力な20ミリが火を吹く前にライトニングの機首に装填された無数の12・7ミリ弾がその筋骨を撃ち砕くだろう。そのさまを脳裏に描き、パイロットは蒼い瞳に笑みを浮かべた。

彼は知らなかった。長い空戦に疲れ、自らの視野も狭まっていたこと、そして斉藤が新たに戦場に現れた2機が存在を正確に見定めていたことを。

そのパイロットは、敵に言わせれば狡猾だった。つまり、味方から見れば優秀な操縦士だった。

雲の合間に隠れ、気配を消して近づいた零戦は、敵に気付かれることなく必殺の銃撃を双胴めがけて叩き込んだ。

火葬の炎を纏って墜落するライトニングに、コルセアは自分の浅はかさを悟った。さっさと逃げていればよかったものを、なまじ小策を弄したために自らを追い詰めてしまったのだ。

「これで」

フットバーを踏み込む。揚力を失った零戦はふわりと落下しながら半回転し、なんとか逃れようと機動するコルセアの機尾を捉えた。

「終わり、だ！」

吐き出すような裂帛の気合に銃撃音が重なった。

4筋の火線は、今度こそ狙いあやまたずコルセアの機体に殺到した。

右主翼に集中した弾丸は堅固な装甲を難なく破壊し、一部は燃料タンクを貫いて発火させた。そのさらに外側に命中した20ミリ弾はジュラルミンの外装を紙のように突き破って弾頭に詰められた炸薬を起爆させ、主翼を支える桁板を真つ二つに折った。

右主翼の半分をもぎ取られ、煙に巻かれたコルセアがこまのように回転しながら墜落するのを確認した斉藤は、すぐに次の行動に思考を移した。すでに撃墜確定判定を受けた敵の機体から黒い塊が飛び出したことも、その塊が白い華を空中に咲かせたことも彼の興味の埒外にあった。

必死に搜索した斉藤は、やがて地上すれすれを北西へ飛ぶ損傷した零戦を発見した。

左の尾翼はぼろぼろに破壊され、主翼の燃料タンクからは細く白い糸を引いている。煙を吐くエンジンは時折プロペラの動きを止めた。そして、穴の空いた風防は血の色に彩られていた。

明らかに死に体の、しかし確実に生きている、白井の零戦だった。そしてその機体が斉藤の勝利を賞するかのように小さくバンクを振るにいたり、斉藤の歓喜は爆発した。

「中尉！」

兼子少佐の言を借りるなら「飼い主を見つけた迷子の仔犬のように」「白井機のもとに駆け寄る斉藤を、後ろから見つめる一対の瞳があった。」

「まったく、なんて危ない戦い方をする奴だ。確かに強いが、あれじゃ命がいくらあっても足りないだろうに」

呆れたように沈着げな顔を振るその零戦乗りの名前を高原茂という。隼鷹戦闘機隊の二等飛行兵曹、年齢は誕生日を1ヶ月後に控えた16歳。

後には共に無数の撃墜マークを積み上げることになる2人の、これは初の協同撃墜であったが、残念ながらこの事実はその時代の波瀾に呑み込まれ、世に知られることはない。2人が知り合うまでに、歴史はあと1年もの歳月を要求していた。

五章 恩讐の果てに（後書き）

投稿の際のミスにより別の文章を誤って掲載してしまい、一時混乱させてしまいました。申し訳ありませんでした。

六章 また会う日まで

ガダルカナルに築いた米軍の橋頭堡に対し、それまでの最前線であつたラバウルは遠すぎた。

1000キロという数字をヨーロッパに当てはめると、その距離はロンドンからイタリアのナポリに達する。1940年のバトル・オブ・ブリテンで英独両軍の主力戦闘機が幅わずか40キロのドーバー海峡を隔てて大苦戦したことを考えれば、南太平洋の異常な広さも理解できるだろうか。

しばらくはラバウルから無理して航空隊を飛ばすとしても、それを何ヶ月も続けては搭乗員の身が持たず、まさか虎の子の空母機動部隊を四六時中張り付けておくわけにもいかない。長大なソロモン列島線上に早急の前進基地構築の必要性は疑いなかった。

かくして、それまでソロモン群島の中で比較的大きな島という以上の価値を持たなかったブーゲンビル島は、ガ島争奪戦もたけなわとなるにつれ自身の戦略的地位を向上させてきた。

島の北端にブカ飛行場が設けられ、南端にはブイン飛行場を擁し、そのさらに南ではショートランド泊地が水上機や駆逐艦以下の艦艇の出撃拠点として機能する。今やブーゲンビルは太平洋でも有数の軍事基地として、ラバウルとともにソロモン戦線を動かす車の両輪をなしている。この地名が勝利と栄光のもとに輝くか、後悔と汚辱に眉をひそめながら口にする言葉となるのか。いずれにせよ、その名が歴史の一部をなし、50年後も忘れられず語られるであろうことは確定した事実であつた。

ソロモン群島は南緯5度前後に位置する。戦艦大和が全速力で北上すれば一日足らずで赤道直下に達するような場所である。11月

も終わりといえは内地なら襟を立てて先を急ぐ外套姿が目立つ時季だが、ここブイン飛行場では相変わらず半ズボン姿の水兵が椰子の木陰に憩う風景が散在している。

その滑走路の端で、濃緑色の葉巻型の機体が両翼につけた2基のエンジンを震わせている。ラバウルへの連絡飛行に就く一式陸攻は、そろそろ暖機運転も完了し、空へ飛び立つ準備を終えようとしていた。

その客の一人となるべく、左手に小さな手荷物を下げ、駐機場を横切っていた白井大尉は後ろからの声に振り返った。

「おう斉藤に、滝二飛曹か！」

声こそ張りを取り戻しているが、右手を三角巾で吊り左目を白い包帯で覆われた、白井の姿はあまりに痛々しかった。

「大尉……！」

駆け寄った斉藤の顔は、飼い主を失う仔犬の悲痛に歪んでいた。

何か送別の言葉を言わねばならない、そのためにここまで走ってきたのに、熱くなった彼の頭はなかなか言語を紡ぎ出すことができない。

あの日、飛行場に滑り込んだ白井の命を救ったのは、皮肉にもガソリンの尽きた燃料タンクだった。わずかでも可燃物が残っていれば、着陸の瞬間に脚を折り大破墜座した白井機は炎に包まれそのまま火葬の棺桶と化していただろう。

半死半生の体で救出された白井は右腕を骨折し出血多量でしばらく人事不省に陥ったが、それは回復してしまえば関係ない。そう言えるほどの致命的な障害が白井を待っていた。

左目が、光を失っていた。

戦闘機の航法、索敵、攻撃にとって不可欠な要素を光学的観測が担っている以上、目が悪い搭乗員は存在しえないと言っても過言ではない。片目といえど、その失明は上空での距離感を失わせ、編隊飛行などできるものではない。つまり、白井は零戦乗りとして失格の烙印をはっきりと押されたのだった。

とりあえず飛行機に乗れるだけの体力をつけ、その上で内地に後送となった。他に外傷もあり、平時なら除隊もありえるのだが、残念ながら今は猫の手も借りたい状況で、特に人手の足りない飛行科が戦闘機搭乗経験のある士官である白井を手放すわけもない。伊豆あたりで療養後、どこかの航空隊か内戦部隊で後方勤務になるだろう。ついでのように大尉へ昇進したのは上層部がそれまでの功績を考慮したものであり、同時に今後の働きへの押し付けがましい期待でもあった。

酸欠の金魚のように口の開閉をただ繰り返す斉藤に、舌打ちしつつ先に口を開いたのは白井のほうだった。

「全く、この世の別れてわけじゃないんだ。そんな湿っぽい顔をするんじゃないよ」

「は……」

全く改善する様子のない斉藤に軽く肩をすくめて見せると、今度のもう一人の少年に問いかけた。

「ところで滝二飛曹。貴様の部隊は今ラバウルだろう。なぜブインにいるんだ？」

「飛行長のお供です。我が部隊もこちらに進出する予定で、その打ち合わせだと」

滝の場合は白井とは大した面識がないのだからそれほど悲しむ理由はないはずだが、彼の鋭い眼は軽く伏せられ、唇は硬く結ばれて

いる。斉藤に比べ感情表現が豊かなほうではない彼にとって、それは十分以上に惜別の念を表すものだった。

「そうか、それはご苦労だな。いよいよ長期戦の構えだからな、ブインもラバウルも、母艦部隊もさらに忙しくなる。飛鷹の修理も終わったというから、うちも一度トラックに戻るはずだ」

10月26日に生起した空母決戦、南太平洋海戦と名付けられたそれは一応日本の勝利に終わった。空母1隻を撃沈、1隻を撃破しソロモン海域から敵空母を完全に閉め出すことに成功したのに対し、こちらは翔鶴、瑞鳳の損傷のみで、しかも戦場に踏みとどまったのだから勝ちというのは頷ける。が、日本側も航空機の損害が莫大であり、実質的には痛みわけに近かった。

このような状況の中、不備の重なった陸軍の第三次攻撃は結局なし崩し的に失敗した。さらに戦力を増強しようにも海軍の輸送力に限界に達し、当座の食糧弾薬を送り込むのになけなしの駆逐艦を投入しているありさまだ。「餓島」なるいささか気の利きすぎた造語が生まれる中、戦争の流れは頂点を過ぎ、攻勢から守勢へと後退した。

1ヶ月に渡る熾烈な戦闘の中で飛鷹航空隊も兼子少佐を失い、搭乗員の半数を失っていた。もはや限界、とは白井は言わない。仮にも海軍士官が無責任な発言はできず、責任ある発言をぶつけるべきは前線の兵卒ではなく霞ヶ関の赤煉瓦である。海軍兵学校出身のエリート士官、白井大尉の戦争は舞台を変えてまだ続くのだ。

いずれにせよ、それは斉藤らにとってあずかり知らぬ世界の話だ。白井は表情を改めて口を開いた。

「斉藤には何度か話したと思うが、うちの実家は金沢で金物屋をやっててな。まあ物がなから開店休業状態だが。……戦争が終わったら一度遊びに来い。2人そろってな。酒と飯ぐらいは出してや

る」

それは約束である。守られる保証のない、だが守る意思それ自体が未来を開くであろう、2人に託す言霊である。

「……はい！ 必ず行きますから、いい酒を用意しておいてください！」

「おう、浴びるほど飲ませてやる。せいぜい酒に強くなっておくんだな」

これで量を飲むようになったらこいつは家ごと呑みかねんど、と考えながら淹も頷いた。さすがに白井は元部下の扱い方を知っている。たちまち笑顔を取り戻した斉藤に淹は内心舌を巻いた。こういう男なら雪子の紅顔に華を咲かせることも朝飯前だろうなと考え、次の瞬間には無意味な嫉妬心に気付いて密かに嫌悪感を覚えた。

何しろ不器用さでは斉藤に負けずとも劣らない彼である。空戦ばかり上手くなっても許婚の手を握ることすらろくにできないこの少年が不惑の域に達するには、まだまだ人生の積み重ねが足りないようだった。

彼らの交歓は、だが長くは続かなかった。甲高い、やけに人の苛立ちを誘うサイレン音が斉藤の声にかぶさるように鳴り響き、彼らの意識を緊張に染めた。

『空襲警報、空襲警報！ 戦爆連合40機、北北東方面より侵攻中。戦闘機隊は至急発進せよ。繰り返す……』

この種の放送は何度聞いても慣れるものではない。斉藤と淹は顔を見合わせると、そろって身を翻した。

「大尉、急いでください！」

振り返ると、白井も一式陸攻に駆け寄っている。どうやら陸攻は強引に発進するつもりらしい。暖機運転も済ませた機を今さら隠蔽するのは手間がかかるので、空中退避というのは賢明な手段だ。

空母ならいざ知らず、基地での緊急発進は誰がどの機に乗るかなどいちいち決めない。とりあえず近い機におのおの飛び込んで勝手に飛び立っていくのだ。戦闘機の数が少ないと置いてきぼりを食らう搭乗員も出てきて、そこで奇妙な椅子取り競争が生まれることもある。争って死に近い位置を求めると考えれば、パイロットというのはなかなか不思議な人種ではある。

その点、斉藤も滝も同種族の人間である。すでに整備員が取り付いている手近な零戦のラツタルを身軽に駆け上がり、慣れた手つきでエンジンを始動させた。ゆっくりと出力を上げながら計器を見渡し、異常がないことを確かめる。目に見えない機の癖は、上がってから飲み込むしかない。

「チヨーク外せ！」

すでに機から離れていた整備員が綱を引っ張ると、先に結ばれた車輪止めが外れる。1130馬力の推進力を受けて三翅のプロペラが大量の空気を押し出し、零戦はゆっくりと列線を離れた。

次第に高まるエンジン音が耳障りな警報を押し、機は離陸体勢に入った一式陸攻に続いて滑走路へ進入する。後ろでは滝の乗った零戦が進みだしたところだった。

日本軍の対空警戒網は主敵であるガ島基地からブーゲンビルにいたる列島線上に厚く展開され、それに比べ南北の海上に対する哨戒は万全とはいえない。それは南太平洋海戦で米空母が一時的に全滅していたこともあるが、それにしても海戦から40日が経過している。立ち上がりの遅れの責はやはり早期警戒の不備に帰せられるべきであろう。

開戦以来の付き合いであるドントレス急降下爆撃機にミッドウエーからこの方すっかり顔なじみとなったアベンジャー雷撃機を護衛するのは、愛すべき寸胴すんどうワイルドキャット。おそらく空母エンタープライズの艦載機であろう。少数だがその勢いはすさまじい。上空直衛の零戦が必死に食いとどめているが、わずか6機ではとうてい食い止められるものではない。

劣勢の中で、低空を離脱する陸攻の姿は絶好のかもである。それに目をつけたワイルドキャットが部下の3機を引き連れ、急降下にかかる。

陸攻には2機の零戦が護衛についているが、足かせがついている零戦は持ち前の旋回性能を発揮できないに違いないと見た。護衛機を部下に足止めさせ、自らは陸攻を追った。

海面ぎりぎりで旋回を繰り返す陸攻の後ろについたワイルドキャットは、照準器いっぱいに広がった双発機めがけその主翼から六条の火線を延ばした。目論見どおりなら陸攻の右エンジンを粉砕するはずだったその銃弾は、しかし目標から大きくそれた。陸攻の胴体右側に装備された七、七機銃から放たれた砲弾の一発が半ば偶然に相手を捉え、その衝撃が弾道を歪めたのだ。

運命の神に悪戯されたパイロットは頭に血が昇ったが、とりあえず戦闘に支障がないことを確認して気を鎮めた。獲物は目の前に依然として存在する。発射釦に指を掛け、照準器を覗き込み、そして再び走った衝撃に戦慄した。

今度の衝撃は先の比ではなく、しかも1回どころではなかった。身体を起こし振り返ったその目に悪魔のような零戦の主翼が映り、馬鹿な、と思う間もなく体が機体ごと海面に叩きつけられ、意識が途切れた。向かってくる1機を一航過で火を吹かせた斉藤がなりふり構わず一直線に突撃してきていたことに、彼は注意を向けていなかったのだ。

海面に上がる水柱を背に、急反転した斉藤は滝機の応援に向かう。

だが、すでに1機を落としていた滝は斉藤の到着を待たず鷹のような鋭い切り込みで敵機の腹を前にし、銃弾の刀でもってその機体を正確に薙ぎ払った。

海面に突き立った僚友の墓標を尻目に、白煙を引きながら必死に遁走する影が1機。出端に斉藤が撃破した機である。追えば簡単にスコアを伸ばせるだろうが、とりあえず陸攻護衛の任を果たした2人はこれを見逃した。戦いはまだ終わっていない。

危難を救われた一式陸攻が感謝の念を込めてバンクを振る。斉藤もこれに振り返し、風防の中で敬礼を施した。

白井は陸攻の中でどんな表情をしているだろうか。教え子の戦果に満足げに頷いているのか、それともまだ動きが粗っぽいと顔をしかめているか。もはやそれを確認するすべを、斉藤は持たない。すでに若鷲は親のもとを巣立ったのだ。

ブーゲンビル島は大きいといっても、房総半島の2倍程度の広さだ。それを飛び越えればラバウルはすぐである。山越しにラバウルの名物となっている花吹山の噴火煙を望見した斉藤は、陸攻の護衛はもう大丈夫だろうと判断した。ブインの上空ではまだ空戦が続いており、こちらの加勢に行かなければならない。どうやらここが分かれ目のようだった。

遠ざかっていく陸攻に何度もバンクを振り、飽きることなく振り返る。それもブイン上空が近づくまでだった。

斉藤孝助、滝克俊。2人の軌跡はわずかに交差したのち再び別の方角へ走り出す。それぞれが死を迎えるまで様々な出会いを経験し、多彩な物語を作り上げていくことになるが。

それはまた別の話である。

六章 また会う日まで（後書き）

今回も数度にわたり更新遅延したこと、本当に申し訳ありませんでした。そして私を見捨てず応援してくださいました皆様、感謝のしようもあります。

今後も非力ながら頑張っていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

参考文献

機動部隊（淵田美津雄／奥宮正武、PHP文庫、2000年）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6752b/>

ソロモンの鷹

2010年10月9日15時12分発行